

# 見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち



October

S	M	T	W	T	F	S
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

October 2023 vol.114

## ◆ 十四山西公園（伊勢湾台風災害復興之碑）

所在地：弥富市六條町

交通：近鉄名古屋線「佐古木」駅南約2km

現在は弥富市の一部に属する旧十四山村は、海部地方の南部、蟹江町、飛島村などと接する場所に位置し、面積約10km<sup>2</sup>、合併前の平成15年時点で人口5,700人余り、全域が木曽川河口に広がる浅瀬を干拓して作られた村でした。

木曽川下流部の干拓は、江戸時代に米の生産拡大を目指した諸藩により進められ、250年間で最大9kmも海岸線が後退（陸の面積が拡大）しました。十四山村の開発は、正保4(1647)年に尾張藩の命令により始まったとされ、村の全域が形成されたのは寛保元(1741)年頃とされています。その後、明治39(1906)年に宝地村と、昭和31(1956)年には善太新田の一部と合併し、弥富市と合併する前の十四山村が形成されました。十四山村という村名の由来は、新田開発時に14の新田村があった、干拓時に14の葦山をもとに開発した、などの説が有力とされていますが、「十四山」という力士が、洪水の折に命を投げ出して村を救った功績を後世まで語り継ぐため、という伝説も残されています。

戦前の十四山村は、村内を無数の水路が流れ、豊かな水の恩恵を受け稲作がさかんで、江戸時代には尾張藩の殿様が食べる米を作るほどの緑豊かな水郷村でした。また、明治の初めには、東海道の脇往還であった佐屋街道に代わるルートとして、十四山村を経由する明治の東海道が開通し、街道沿いは賑わいを見せていました。

しかしながら、昭和34(1959)年にこの地方を襲った伊勢湾台風により、村は壊滅的な被害を受けます。もともと

木曽川が堆積した土砂による低湿地を、土を盛った堤防で囲った干拓地であった十四山村の地域では、台風により村の命綱である堤防が決壊、村内に激流が押し寄せ、36名の村民が命を落としました。また、海部地域一帯で堤防の復旧と排水に時間を要したことから、村は3か月に渡り泥海に沈むこととなり、村の風景は一変してしまいました。

伊勢湾台風からの復興にあたっては、台風以前には水路となっていた箇所的大部分は道路とされ、河川の排水機能を高めるため、排水機場も増設されました。また、木曽川総合用水が導入され、湿田の乾田化も実現し、大型機械を導入した集団営農に取り組むようになりました。

旧十四山村中切の十四山西公園には、伊勢湾台風からの復興を記念した伊勢湾台風災害復興之碑が残されています。碑は昭和36年9月に建てられたもので、碑文には、台風の被害とともに、「村民は克く立直り日夜災害復旧に努力した」こと、「クレークを埋める内水面干拓事業を興し土地改良を行ない道路網を整備して舟から自動車へ、鋤からトラクターへと農村の近代化に一大転換を図った」ことなどが記され、犠牲者への慰霊の気持ちとともに、村民の努力による復興を記念する思いが込められています。

伊勢湾台風からの復興を成し遂げた十四山村は、愛知県を代表する大都市近郊農村として、県下でも有数の稲作地域となりました。ミツバをはじめとする野菜の水耕栽培や、花き栽培等も盛んで、かつての緑豊かな風景を取り戻しています。



◆ 災害にまつわる碑や史跡には、実際にその地域で起こったことが記録されているだけでなく、当時の人たちの思い（二度と被害を繰り返さないように、など）が込められています。碑や史跡の前では、災害が実際にこの地域で起こるということを実感していただくとともに、そうした先人たちの声に耳を傾け思いを巡らせ、身の回りの備えにつなげ、これからの防災に活かしてください。



## ◆見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち バックナンバーから

### ●伊勢湾台風殉難之碑 (vol.64,2019.8)

所在地：海部郡飛島村新政成

交通：伊勢湾岸自動車道「飛島」IC北西約3km

伊勢湾の最北部に面し、日光川と筏川に挟まれた人口4,500人の飛島村は、面積22.53km<sup>2</sup>の小さな村で、村域の平均海拔はマイナス1.5m、臨海部の埋立地を除き、ほとんどが海拔ゼロメートル地帯となっています。江戸時代に干拓が進んだ北部では、米や麦、野菜、花卉などの栽培が盛んに行われる一方、高度成長期に埋め立てが進んだ南部は、名古屋港の一部としてコンテナふ頭が整備され、鉄鋼、航空機産業などの工場のほか、火力発電所も立地し、村の昼間人口は夜間人口の約3倍の13,000人に上っています。

昭和34(1959)年9月の伊勢湾台風では、飛島村を含む海部地域においても高潮により海岸堤防がごとごとく破壊され、大規模な浸水に見舞われました。飛島村では132名の

尊い命が失われ、流失、全壊、半壊となった住宅は722戸に及ぶなど、甚大な被害が発生しました。また、当時は貧しかった村の状況から復旧作業は後回しとされ、3か月近く湛水した状態となり、集団避難していた児童生徒が帰村できたのは、12月20日頃でした。

新政成地区の南端、筏川にかかる新末広橋の東詰に、伊勢湾台風による132名の犠牲者の霊を弔う伊勢湾台風殉難之碑が建立されています。正面右手の高さ6mの白色の塔には「伊勢湾台風殉難之碑」と刻まれ、隣接する幅6mの赤茶色の壁面に碑文があります。碑文には、台風の状況、飛島村の被害、台風当日の様子などが記され、犠牲者への慰霊の念と全国からの救護に対する感謝、教訓として後世に語り継ぐ思いが述べられています。



◆詳細は、見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち vol.64 (<https://www.gensai.nagoya-u.ac.jp/rekishijishin/geppo.html>) をご覧ください。

## ★ 弥富神社例大祭

弥富神社で毎年10月第2日曜日に行われる弥富神社例大祭は、弥富市内で最大規模の祭礼です。

中六・小島弥生台・前新田の3地区からの石取り車、上之割・中之割・下之割・海老江・車新田・東弥生台・鎌倉の7地区からの神楽屋形などが市内を練り歩いた後、お昼頃に弥富神社に集合します。山車は豪華絢爛なものが多く、名古屋らしさを感じられます。



弥富市 HP より

弥富神社の境内に設けられたステージで披露される、迫力のある獅子舞や剣舞などの伝統芸能も見どころのひとつです。会場には様々な屋台も立ち並び、活気ある秋祭りの雰囲気を楽しむことができます。

### ～街道で巡る～

前ヶ須街道は、明治の始め頃に、東海道の脇往還であった佐屋街道が、佐屋川の流量が減り通行できなくなったことを契機に、明治の東海道として、熱田から弥富の前ヶ須まで新田を通るルートとして計画され、明治5(1872)年に開通しました。

旧十四山村では、前ヶ須街道の開通に伴い、街道沿いに賑わいも生まれました。現在は当時の面影をわずかに残すのみですが、天皇陛下ご一行がお休みになった西蜆には、明治天皇西蜆御小休止所の碑が建てられています。



弥富市文化財マップより

### ●ブレイクタイム●

#### ♪ 二つお宮の松

正保4(1647)年以降、十四山地区北部の村々で新田が開発され、村の安全と五穀豊穡を祈願し、各地に神社が建立されました。東蜆の山神社は、承応3(1654)年、伊豆国三島大山素美神社を勧請したと伝えられ、境内には、神社建立の頃に植えられたとされる「二つお宮の松」と呼ばれる立派なクロマツがあります。

昭和34(1959)年の伊勢湾台風の被害で、この地域の樹木はほとんどが枯れてしまいましたが、この老松は奇跡的に生き残りました。現在では樹高約16m、太さは根回り3.1mに及び、多くの住民に親しまれています。



弥富市 HP より

◆この地域の災害に関する碑・史跡、資料・体験談集、地域に残る古文書、研究資料、郷土史研究者・団体などの情報がありましたら、[gensaisan2014@gmail.com](mailto:gensaisan2014@gmail.com) まで情報をお寄せください。

◆この地域の歴史災害記録をオンラインツアー形式、マップ形式で紹介しています。各地の碑や史跡等にご興味をお持ちいただけましたら、『災とSeeing』のホームページ (<https://www.saitoseeing2020.jp/>) をぜひご覧ください。

(発行：減齋の会・名古屋大学減災連携研究センター 2023年10月)